

美術の窓(98)

「鏡像」偶感

大和文華館 顧問 関口正之

「鏡像」は鏡の面に線のみによつて神仏を表している。主尊はほとんどすべての場合、正面を向いている。我々は鏡像を拝見するとき、仏像彫刻や仏画の本尊像の場合と同様に鏡像の神仏と向い合う。鏡像は陰影を表現することは無く、また立体表現も念頭に無いと思われるので彩色や隈取りを加えた本尊画や彫像の本尊像から受ける印象とは大いに異なる。鏡像の神仏表現はそれより存在感が稀薄である。そして、そこには線描で表わされた白描図像と同様に簡潔な美しさを感じられる。

しかし、鏡像には白描図像とは別種の世界が現われているように思われる。鏡像の場合は白描図像の諸尊よりも像容に更に透明感が漂う。その理由は、鏡の面を画面として選んだことにあるに相違ない。

現存する鏡像の鏡面を見ると、黒変したものもあるが現在も銀白色を保っている例も多く、鏡としての役目を終えた鏡面だけを選んで鏡像に仕立てたとは必ずしも言えない。やはり、万象を映す輝いた鏡面、あるいは少し曇り始めたが銀白色に輝く鏡面を画面として神仏を表現したものと考えられる。

鏡面は線刻された像に加えて他の景物をも映し、線刻された像はそれら景物とともに虚空に表わされるように見える。輪郭線のみによって表現されていることは白描図像と同様であるが、鏡像の場合は像の背後に像身を透過して景物が見えることが起こりうる。一瞬、幻像とも思える透明感を帯びた神仏表現こそ鏡像の特色の一

つであると言えるであろう。

鏡像は、中国北宋時代の作品が奄然によって請来されているので、表現形式の起源は中国大陸にあることは明白であるが、我国において平安時代後期から鎌倉・室町時代にかけて多くの作品が造られてゆく契機は、鏡面に線刻された神仏の姿が輪郭は明瞭でありながら透明であるという表現の不思議さを気付いたことにあるのではないかと考えられる。

日本に仏教が伝えられて以来、礼拝の対象となる本尊は、彫像にせよ画像にせよ、祈願を受留めて貰えるに耐える確固とした存在感を示す本尊像として造像されてきた。それに対して鏡像は、簡潔で明瞭に表わされておりながら虚気楼か映像に似てホログラムのようなはかなさを感じさせる点に特色がある。中国製の鏡像を初めて見た我国の人々の中に、このような背景の中に神仏を表現することが日頃脳裏に描いていた神仏の姿にかなり近いものがあるという共感を持った人が存在したと思われる。神仏は変幻自在に現われるという考え方にとって鏡像は、好意をもって受入れることができる表現であったに相違ない。

古来、我国では鏡は特に神聖な意味をもつものであった。神々の依り代であるとか祖神の御霊代であるとも言われ、御神体であるとも言われる幽玄な存在であった。中国においても魔除けと考えられ、入口に懸けることがあったとされる。合わせ鏡を試みると同じ光景が少しずつ小さくなって無限に奥に続いて映っている。鏡は確

かに別の世界を見せていると思える瞬間もあり、神々と関わるものが多く神秘的で靈妙な仕器であった。

我国では神々は世界を動かす大いなる力であるとされ、我々はその力の働きを様々な形で感じるものであると考えていた。神々が人間の姿となって現われることは滅多になく、またその姿を我々が目にするなど稀であると思われていた。それ故に、神秘的だと見ていた鏡に神仏の姿が表わされたことを知ったとき、輪郭線のみが見えて身体が透明な鏡像は、平素思い込んでいた神仏の姿の一つの現われ方をまのあたりにした思いであったことは想像に難くない。

このようにして鏡像は、中国大陸や朝鮮半島における鏡像製作の場合とは異なる独自の理由が加わった鏡像という形式を学び取ったと考えることは可能であろう。

鏡像は、像身が透明に見える瞬間があるので社殿等では主祭神や本尊になり難かったことよるものか、社殿の軒下や長押近く

懸け並べられたと考えられる。平面に線描された神仏を社殿等に奉懸するという形だけを考えると、近世に盛んとなる絵馬奉納に似ているが、絵馬は願いの内容のみを記したものであった。それに対して鏡像は、鏡面に表わされた神仏が鏡という神秘的な威力に支えられて、鏡面を言えば現世への入口として影向されることを祈る宝物であった。懸けられた鏡像は、社殿等を単に荘厳するにとどまらず、神仏が何時でも出現することができる神聖な靈宝であった。

鏡像という形が認められた初期の頃の風景は以上のようなものであったと推測できる。

ひとつだけ鏡像の形式が普及し始めると、主題等の点から様々な工夫が加えられ、鏡像表現は多彩となる。今回の「鏡像」展は、鏡像表現の展開を東アジア全体を見通す視点から見直す意欲的な試みである。この展覧から何が見えてくるか大いに期待される。



重文 十一面観音鏡像
福岡市美術館

国宝 阿弥陀来迎図鏡像
三重・金剛証寺

季刊 美のたより No.156

平成18年10月7日

発行 大和文華館